
恋愛のカタチ

莉雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛のカタチ

【Nコード】

N9024C

【作者名】

莉雨

【あらすじ】

入内が決まった平安時代のお姫様と一従者の彼。婚約者のいる大企業のお嬢様とその執事の彼。それぞれがお互いのことを思いつつも、身分違いのために自分の気持ちを伝えることの出来ない4人。彼らを選ぶそれぞれの、恋愛のカタチ。そしてその結末とは・・・。

01 ワタシと執事 - 瑞穂Side -

幼い頃の私は、誰もが対等で、人は皆、平等だと思っていた。けどそれは真実ではなくて。

莫迦^{ばか}みたい裕福で、くだらない事に拘る。

莫迦^{ばか}みたいな人達がいた。

そんな単純なことに気が付いたのは、幼馴染^{おさなじみ}だった彼が、私の執事になった時。

気分は最悪だった。

今の私にとって、身に付けている綺麗なドレスも、可愛い装飾品も、それを引き立てる物でしかない。

いつもは嬉しくなる窓の外で降っている雪も、今日は何とも思えなかった。

雪・・・ああ、今日はホワイトクリスマスかあ。

なのに

「はあ・・・」

気が付けば、自然と漏れてしまった溜息。

これからのことを思うと唯々憂鬱で。

それを思い、本日二度目の溜息を吐こうとした時だった。

静かな部屋に、ドアをノックする音が響く。

靖也^{せいや}だ。

慌てて背筋を伸ばす。

「お嬢様、支度は整いましたか？」

ドアの向こうから聞こえた声は、やはり予想した声と科白、セリフそのままだった。

「うん！終わったよー」

明るくそう返事をすれば、彼は「失礼します」と言って部屋に入ってくる。

「ねえ。このドレスどう？？素敵でしょ？」

そう言ってクルリと回り、無邪気そうに彼に見せると、優しく微笑んでくれた。

そんな彼の表情と言葉で、またも私の気分は沈んでいく。

「流石、美坂様みさかがお選びになったドレスです。瑞穂様おじみづほによくお似合いですよ」

「だよね！雅紀様まさき、センスいいもん」

私にピッタリ。そんな、心とは正反対の言葉が、気付けば口から零れ。

大嫌いな婚約者候補の名前を、笑顔で繰り返す言いつ。

気分、最悪。

「瑞穂様みづほ、そろそろ迎えの車がお見えになっているはずずです。行きまいしょう」

「うん！」

いつの間にか慣れてしまった様付きで呼ばれる名前。
まるで、私の名前が「瑞穂」から「瑞穂様」に変わったみたいで。
最初は様を付けないでって言ってたけど、今ではもう呼んではもらえないんだと諦めた。

「今日は、正式に婚約が決定する大切な日ですよ。頑張っていらしてください」

「うん、^{モチロン}勿論！頑張って婚約決めてくるよ」

私が頑張らなくとも、もう既に、決まっちゃってるけどね。
そういう決まりだから。

クリスマスに婚約して、正月に婚約発表して。
そして私の16歳の誕生日に式を挙げる。
全て決まったこと。

私は今、親の敷いたレールの上を順調に進行中なのだ。

最悪で、最悪だけど。

表面上は、あくまで嬉しそうにして。

また私は、自分の気持ちに嘘を塗り固める。

「では、行ってきます」

大好きな彼とではなく、大嫌いな彼とクリスマスを過ごしに。

「いってらっしゃいませ」

そう言って、大好きな彼が車の扉を閉めた

私はまた、行き先を間違えた車で出発する

02 幼き日のボク等 - 良次Side -

「姫様。走り回ってはいけません。早くお戻り下さい」

「良次もこっちにおいでよ！」

だいたいり
大内裏を姫様が駆け回っていた。

初めてくる大内裏そこの、姫様の屋敷とはまた違うその広さに、興奮しているのだろっ。

姫様はいくら呼びかけても走るのを止めはしない。

俺も姫様を追いかけて、走った。

辺りに他に人影は無く、此処にいるのは俺たち二人。
姫様はあくまで楽しそうだったが、俺は必死だった。

ただくに
忠邦様に姫様のことを任されたんだ。
あきこ

明子姫に何か無い様に、しつかりしないと

っていうか、止まってくれ・・・！

情けないけど、もう、足が纏れそうで限界。

そんな俺の思いもよそに、姫様は止まってくれる様子も見せ無い。
一体、その小さな体のどこにそんな体力があるんだ？

早く姫様を掴まえないと・・・。

そう思っ、以前来た時に覚えた此処の地理を考える。
と、ふと思ひ出せた。

あれ、確かこの先は・・・

「姫様、危ない！其方そなたには池が・・・！」

「え・・・？」

そう叫んだ刹那。

バシャーン

鯉が飛び跳ねる。

池に思いっきり俺の体が浸かっていた。

明子姫様は池の前で尻餅をつき、啞然^{あぜん}としてこつちを見ている。

実は、姫様が池に落ちそうになった時に、俺は咄嗟^{とっさ}に姫様の手を引いていたのだ。

で、それで明子様を無事助けられたら良かったのだけど、

代わりに勢いが付いて止まらなくなった自分の体を、其処に落とすてしまっていた。

服はビショビショ。

冬だからちよつと寒いな、なんて暢気に思ったりしてみたり。

乾いた笑いが出てくる。

はは・・・。

俺、格好悪^{カッコ}

けど、

「姫様、御怪我はありませんか？」

明子姫が無事で良かった

「良次・・・！えっと、どうしたら・・・」

明子姫はその一言に我を取り戻したのか、急にオロオロし始めた。

そんな様子が可愛くて、思わず笑ってしまう。

「取り合えず、池から出てもいいですか？」

池に落ちてびしょびしょの者が笑顔で、逆に落ちていない者が慌て顔。

傍から見たらきつと変な光景だっただろう。

けど、そんな幼き頃が、幸せな日々だった

ねえ、姫様。

あの頃は唯、無邪気で。それがどんなに幸せだったか。

知ったのは、其れを失くした後だったけど。

03 執事のオレ - 靖也Side -

もうすぐ、新年が訪れようとしていた。

一般家庭の正月ならば、家族でのんびり過ごすはずなのかもしれないが、生憎、俺が仕えている主人は大企業の一人娘。

新年早々パーティーやら何やらで、とてもそんな正月を過ごせそうも無い。

現に今、俺はパーティーの準備の真つ最中だった。

なのに・・・、作業がなかなかはかどらない。
疲れてる？

否、違う。

本当はその理由^{ワケ}は分かっていたけども。

認めたくはなかった。

そう、そんなはず無い。

一度、休憩でもしよう。

そして、心を入れ替えてもう一度始めればいい。

そう思つて時計を見ると、新年まで丁度あと十秒。

心の中で、カウントダウンをスタートさせた。

10・・・9・・・8・・・7・・・6・・・5・・・4・・・3・・・
2・・・1

トント

「明けましておめでとう。靖也」

年が明けると同時に開かれた扉に、見慣れた人影。

驚いた。正直、驚いた。

まさか、新年早々、しかも、ほんとに年が変わって一番に、まさか一番会いたい人に会えるなんて。

そんなこと、あるわけないと思っていたのに。

だからきつと、この時の俺の返事は、声が掠れていたと思う。それくらい、気が動転していた。

「おめでとうございます、お嬢様」

「ごめん。明日のパーティーの準備中だった？私、邪魔？」

「いえ、今休憩しようと思っていたところです。お嬢様もお茶、いかがですか？」

「うん、貰う」

瑞穂様に椅子を出し、俺は一人紅茶を淹れに向かう。

一人になれてよかった。そう思った。

まだ、気が動転したままだったから。

早く落ち着かせよう。この紅茶を飲んで。

俺はお嬢様の執事

それだけだ。

それさえ忘れなければ、きっと準備も終わるし、明日のパーティーもきちんと言われる。

「お待たせしました。お嬢様、どうぞ」

そう言つてカップを置けば、「ありがとう」そう言つて瑞穂様はそれに手を伸ばす。

その手には、高級そうな婚約指輪が填められていた。

「こんな時間にどうかされましたか？」

いくら年明けだからと言つて、今日はパーティーがあるのですから、早くお休みにならないといけませんよ」

「うん。でも、此処で過ごす最期の年明けだし！ちよつと起きとこうかなあつて」

もう直ぐ、瑞穂様はいなくなる。

結婚して、この家を出て行く。

その場合、彼女の執事である俺はどうなるのだろう。

主人がいなくなつてしまうのだからクビかな。

そんなくだらない事を考えてみたりして。

現実逃避だ。

好きな人が他の人と結婚してしまうことからの。

「そうですね。今日は特別ですよ？」

あちらの家に行つたらこんな風に夜中に部屋から出歩くのはお止め下さいね」

「もちろん。」

あつちではちゃんと大人しく、如月財閥のお嬢様やるから安心して！」

嗚呼。本当は今会えて嬉しいのに。

出てくる言葉は執事としての小言ばかり。

嫌な奴だな、俺。

「お譲様なら、あちらの新しいメイドの方々とも直ぐ仲良くなれるでしょうし。」

直ぐに美坂家の一員になれるすね」

「だといいなあ。今度も、靖也みたいな人がいると良いんだけど」

心に無い科白^{セリフ}ばかりだ。

本当は、あんなところになんて行って欲しくない。

この前のクリスマスも、本当は送り出さくなかったのに。そして今日のパーティーも。

婚約して、婚約発表して、結婚して。

本当は、全部壊してやりたい。何もかも。

俺は、お嬢様の執事

「あーあ。何か眠くなってきた。部屋に戻るね」

「お休みなさいませ。お嬢様」

「お休み。靖也」

まだ、忘れてはいない。

でも、本当は誰よりも・・・

君を愛してる

絶対に貴女^{アナタ}に伝えはしない、俺の本心。

04 遠いワタシと彼 - 明子Side -

世界が狭くなった。

幼かった頃は、自由に外を走り回り、自由な時間がまだ有ったはずなのに。

今は、何一つ残って無い。

生活は唯、窮屈だった。

そしてそれは、私の入内じゅだいが決まってから、更に厳しくなる。

「姫様」

「どうしたの？」

私が直接会えるのは、仕えの女性だけ。

今日も、その彼女がやってきた。

「良次様がお見えになりました」

「わかったわ、貴女は席を外して」

久しぶりの事だった。

最近、彼も滅多に訪ねて来てはくれない。

昔は二人でいつも一緒に遊んでいたのに。

今はもう、顔を合わせて話す事さえ叶わない。

簾で遮られた先に、彼はいた。

「明子姫様。お久しぶりで御座います。この度は、姫様の御入内、大変喜ばしく」

「良次・・・」

「姫様？」

仕えの者達には皆席を外してもらって今は二人だけ。
そう思うと、ここから出て、直接良次を見たい衝動に駆られた。
そんなこと、無理だけど。

「覚えてる？初めて大内裏に一緒に行つた時の事」

「・・・・・・はい」

「あの時、良次は私を助けてびしょ濡れになつて」

「覚えてます。全部」

「あの頃が、一番楽しかった・・・」

自由で。貴方に触れることさえ簡単だったのに。

「今までありがとう。何度も、良次に助けられてきた」

「私も、姫様に仕えられて光栄でした」

姫だとか、従者だとか、そんなもの無くなればいいのに。
姫という鎖が私を縛つて。

「本当はね、良次のことが

」

嗚呼。

なんて莫迦なことを言おうとしているのだろう。

其の先の言葉は、声にならず消えた

本当はね、良次のことが

好きなの

05 コクハク - 瑞穂と靖也 -

純白のウェディングドレス。

それを着ているのは瑞穂だった。

結婚式当日のこと。

「よくお似合いですよ」

そう褒める靖也に、瑞穂は「ありがと」そう言って微笑む。
華やかな結婚式前のワンシーン。

けど二人とも、内心は穏やかでない。

今日で、2人は別々の道に行くことになる。

それは、至極当たり前のことだけど。

その現実が、唯辛い。

「では、美坂様をお呼びしてきます」

「待つて・・・！」

そう言つて部屋を出ようとする靖也の服の袖を、瑞穂は咄嗟に掴んでしまっていた。

一瞬、靖也は驚いたような表情になる。

「もう少し・・・一緒にいて」

その声は、彼女らしくなく、震え、掠れた声だった。

靖也は何も言わずに部屋に残った。

離れたく、ない。

これが、別れを惜しむ兄弟で、唯の兄妹愛だったらどんなによかったか。

そうしたら、こんなに苦しむことも無かったのに。

沈黙が空間を支配する。

その沈黙を破ったのは瑞穂だった。

「したくない」

「え？」

「結婚なんて　したくない」

言ってからしまったと思ったが、もう止められなかった。閉じ込めていた思いが溢れ出す。

「お嬢様、そういうことを無闇に言うてはいけませんよ」

「靖也はいいの！？私が結婚しても」

「美坂様は旦那様がお決めになったお嬢様のお相手ですよ。お嬢様だつて　」

「私は嫌なの！あんな人、大嫌い！」

その言葉に靖也は目を見開いたが、一瞬のことで直ぐにもとの表情に戻ったので瑞穂はそれに気付かない。

「お嬢様、今になって我俣を言わないでください」

言い聞かせるようにそう言った。

感情的になっっている瑞穂と違い、靖也はあくまで冷静だった。まだ忘れてはいない。

自分が執事なのだということを。

「私は、靖也のことが大好きなのに！」

感情に任せて吐き出したその一言で、今まで保たれていたバランスが崩れ去った。

絶対、胸の奥で留めておこうと思っていたものが、ついに出てきてしまった。

もう、戻れない。瑞穂は覚悟を決めた。

一方靖也は、いつもなら「冗談はやめてください」とでも言うのに、らしくもなく、その場で固まってしまっている。

コンコン

「瑞穂、支度は終わってたかい？」

美坂だった。

靖也の手を、瑞穂は無理やり引っ張って窓から部屋を抜け出す。さっきの一言で、靖也の中でも何かが崩れ去っていた。

「何を考えているんですか、貴女は！？」

もう、部屋からだいぶ離れ、走るのを止めた時だった。

二人は、昔よく遊んでいた湖の側まで来ていた。

いきなり靖也に怒鳴られ、瑞穂は声を失う。

今までずっと一緒だったけど、靖也がこんな風に自分に言ってくるのは初めてのことだった。

「折角俺が自分の気持ちを隠して、今までやってきたっていうのに！
貴女の考えなしの一言のせいで台無しです」

「考えなしって・・・！」

「考えなしですよ。部屋を抜け出して。そうするつもりですか!？」
人の努力を無駄にして。ったく、どうしてくれるんだ。

自分の気持ち？

人の努力？

「・・・あれ？え・・・？」

瑞穂が違和感に気付く。

「待つて、もしかして靖也・・・」

「もしかしくなくてもそうですよ。俺は、瑞穂が好きです」

「うそ・・・」

「こんな時に嘘ついてどうするんですか」

瑞穂がその場にへたり込む。

「何してるんですか」

「だって・・・気が抜けて・・・」

「しっかりして下さい。こんな状況にしたのは瑞穂なんだから」

「わ、わかつてる」

「俺たちが両思いだったのは一先ずおいといて」

これからどうするかが問題ですね。

私は両思いだったことのほうが問題だよ・・・。

瑞穂はまだ、気付いていない。

靖也の呼び方が、「瑞穂様」から「瑞穂」に変わったことに。

今までの行動がいきなり大胆すぎて

もう瑞穂の頭はついていけてなかった。

06 トワの絆 - 明子・良次 -

明日がいよいよ入内の日。

今晚が明子が此処で過ごす最後の夜だった。

眠れない

もう、夜は深い。

早く寝ないとは思うのだが、明子はどうしても寝付けなかった。
明日からのことを思うと憂鬱でたまらないのだ。

気晴らしに、少し月でも見よう。

そう思っ部屋から出た。

冬の夜の空気は冷たく、透き通っていて。満月が綺麗に見えた。

「っきゃ・・・」

どのくらい月を眺めていたのだろう。

気付けば月に見惚れていて、時間感覚がない。

突然、後ろから口を塞がれた。

誰？

そう言い掛けて思いとどまった。

私、この人を知ってる。

明子は口を塞いでいる手を外し、名前を呼んでみる。

「良次・・・」

振り返って見た顔は、やはり良次のものだった。

「明子姫様。御無礼をお許し下さい。」

姫様が入内してお会いになれなくなる前に一度・・・」

明子は良次を咎める気など無かった。

寧ろ、会えて嬉しいと思っていた。

二度と叶わないと思ったことが、今、叶っているのだ。

こんなに近くで会うのは、そして触れることが出来たのは、一体何時ぶりだろう。

お互い無言で、しばらく座って月を眺めていた。

「明日、入内したらこんなことも二度とできないわね」

「・・・」

「また、昔みたいに二人で遊びたい」

「・・・」

「私、入内したくない」

「姫様・・・」

「良次、お願い。此処から連れ出して」

「本気・・・ですか？」

前からずっと言いたかったこと。

もう、迷いはない。

明子が無言でうなずくと、良次は立ち上がって、明子に手を差し出した。

明子は其の手を取る。

二人で屋敷を抜け出した。

屋敷を出るのは何とかなった。

けど、明日には明子がいなくなったのが見つかってしまっただろう。きっと明日には、明子を探しに追っ手が来てしまう。

そうなれば、スグに見つかってしまい、明子は無理やり入内させられ、良次は殺されてしまう。

こうなった以上、それは分かりきったことだった。

二人は、昔よく遊んでいた湖のそばにいた。

「良次、こんなことに巻き込んでごめんなさい。

でも・・・私はずっと貴方のことが好きだった。今までも、勿論今も」

「姫様・・・」

「ごめんなさい。こんな気持ち、貴方に言うつもりでは・・・」

「俺も」

「え？」

「俺も姫様のことが好きです」

そんな窮地に立っているのに、二人の心は穏やかだった。

二人とも、「好き」。唯その一言でよかった。

二人で寒さを紛らすように、お互い引っ付いて其処に座り、夜が明

けるのを待つ。

昔の思い出話を沢山した。
直接会えなかった年数を埋めるかのように。
沢山のことを話した。

「こんなに喋ったのは久しぶり」

そう言って、また笑った。

吐いた息は真っ白だったが、そんなのはまったく気にならない。
幸せな時間だった。

もう直ぐ、日が開ける。此れからどうするか。

もう、二人の気持ちは決まっていた。

「行こうか」

どちらとも無くそう言った。

良次が先に立ち上がり、明子に手を差し出す。差し出した手を取って、明子も立ち上がった。

二人とも、無言だった。

唯、お互いの手を堅く繋いで

湖に向かって歩き出した

これからは、ずっと一緒にいられる。

貴方と、永久とわに・・・・・

空から静かに雪が舞い落ちた

07 カレの本性 - 瑞穂・靖也 - (前書き)

いよいよこの話もと少し。

ですが、ここから靖也のキャラが壊れてきます。
壊れた執事さんを見たくない方はご注意を。

07 カレの本性 - 瑞穂・靖也 -

「し、心中!？」

「丁度そこに湖もあることですし、二人で入りますか？」

「っちよ、ちよっと待って、靖也。心中つてのはちよっと・・・」

瑞穂が慌てたように返事をする。

靖也は至って冷静そうで、真顔だった。

「冗談ですよ。ようは、その程度の覚悟があるかって事です」

第一、折角両思いだと言うのに死んだら意味無いですし。

そう言う靖也に、瑞穂はあんな顔でそんなこと言われたら冗談に聞こえないって。

心の中で突っ込んでいた。

「っていうか、靖也ってこんなキャラだっけ・・・？」

もつと真面目で誠実って感じだった気がするのに。今ではまるで・

・
黒い？

と言つかまるで、王子様の性格のような。

今までと正反対の性格に見えるんだけど・・・。

一人心中で思案していると瑞穂の思いもよらぬ所から返事が返ってきた。

「そんなことはありませんよ」

勿論驚いたのは瑞穂である。

「え！？もしかして靖也つて心の声が聞こえたり・・・」

「心の声？思いつきり声に出てましたが」

「ええ！？」

一步、靖也が近づいてくる。思わず、瑞穂は一步後ずさった。
が、後ろは木。

下がれない。ヤバイと思ったが、時既に遅し。

靖也の両手に阻まれ、横に逃げることも叶わなかった。

靖也の手が伸びてきて、頬に触れる。

そして、彼の顔も近づいた。お互いの吐息が感じられる距離。

「俺は、元がこの性格なんです。

確かに今までは瑞穂の執事だったから性格作ってましたけど？」

「・・・っ」

ななな・・・顔が近い！

間近で見る靖也の顔は端整で。

真直ぐと見つめてくるその瞳は鋭く、瑞穂を縛り付けて逸らすこともできない。

瑞穂の顔は見る見る赤くなり。

完全に、靖也が主導権を握っていた。

「こうなった以上、もう瑞穂とは主従関係でなくなった訳ですし。
その必要ありませんからね」

そういつて靖也が微笑む。

その表情は、執事だったときのそれとはまた違っていた。顔の温度が更に上昇していくのを感じる。

もう、瑞穂は何も言い返すことが出来ない。

ついには靖也の顔も見えていられなくなつて、俯うつむいた。

靖也はそんな瑞穂の変化を分かつてか分からずか（否、いや絶対分かつてだけど）、更に言葉を続ける。

「さて、結婚式当日にこうやって美しい花嫁を奪還できたのは良いですが、どうやって瑞穂の御父様（社長）に認めてもらいましょうか。」

既成事実でも作つときですか？」

「き・・・既成事実つて・・・？」

「瑞穂の想像通りだと思うけど？」

靖也は瑞穂の反応を見て楽しんでいた。

それはもう。こんな嬉しそうな靖也を見たのは久しぶり、って程に。それとは反対に、瑞穂の心臓は緊張で破裂しそうな気分だった。

悪魔だ。

生まれてから今までずっと一緒だった筈なのに。

なんでそのことに気付かなかったんだらう。

「私、人選間違えた？」

「後悔しても遅いよ。瑞穂が俺を誘惑さそひしたんだから」

こんな靖也とだと、心臓が幾つあっても足りない。

これからどうしよう、と思いつつも、どうやって両親を説得するか

悩んでいた。

やっぱり、大好きなのだ。

世界で一番、靖也のことが。

そしてまた、靖也も

・
・
・

近づいてくる唇に、瑞穂はゆっくりと瞳を閉じた

08 恋愛のカタチ

「おかあさま、おとうさまがかえってきたよ！」

まだ二、三歳の可愛い男の子が嬉しそうに玄関へ向かう。その姿は、幼い頃の靖也そっくりだった。

「おとうさま、おかえりなさい！」

「ただいま、拓真^{たくま}」

そう言っ^なて頭を撫でられた拓真は、嬉しそうに目を細める。そして、彼は後から急いでやってきた女性に目を向けた。

「ただいま、瑞穂」

「お帰りなさい、靖也」

靖也と瑞穂がお互いの気持ちを告げてから、八年の年月が経っていた。

今、暖かな家庭がここにある。

あの後式場に帰ると、瑞樹がいなくなつたと式場は大騒ぎになつていて、勿論、二人はこつてりと叱られた。

が、結婚のことに關しては、瑞穂がしたくないならそれでいいと言われたのだ。

元々、両親は一人娘の瑞穂には甘かつたし、如月家と三坂家の繋^{バイ}がりも、

あつちが執着してただけで、世界の如月財閥としては美坂グループとの繋^{バイ}がりはどつちでもよかったらしい。

唯、次期社長である雅紀の年齢や容貌で瑞穂の相手に相応しいだろ

うと言っことで決めたとか。

だから、そこまでして本当に好きな人セイヤがいいならそれでいいと。

寧ろ、靖也の方が昔から知ってるから安心だ、とまで言われた。

正直、二人は心中・・・とまでいかないが、勘当は覚悟していたので、拍子抜けだったけど。

しかし、そんな寛大な両親かんだいのおかげで二人は付き合うこととなり

（実は、瑞穂の両親より靖也の両親のほうが大変で。仕えているはずの主人に手を出すとは何事だ、と怒鳴られ散々だったのはまた別の話）、

三年前、ついに結婚した。

今は長男の拓真も生まれ、家族円満。

それに会社のほうも順調で、財閥は靖也が継ぐことに決まっていた。そのため、少し忙しいけど、それは仕方ない。

今、幸せ真っ盛りだった。

ねえ、知ってた？

私たちがあの日逃げて行ったあの湖。

昔、私たちみたいに身分違いの恋をした人があそこで心中したんだって。

私たちも、御父様達が許してくれなかったらそうだったのかな。

それもきつと一つの愛の形だけど。

私は御父様たちが許してくれたことに感謝してるの。
だって、

今此処に靖也がいて、私がいて。

そして、拓真がいる。

それがとても幸せだから。

私はあの日のことを後悔してない。

靖也は 今幸せ？

それは、あまりにも当たり前すぎる問いかけで。

靖也は答える代わりに、瑞穂の肩を抱き寄せると、そつと唇を合くちびるわせた。

「今度、あの湖に拓真を連れて行ってみようよ」

「そうだね、拓真に教えてあげないと」

「なんて？」

「それはもちろん、

 ここでお父さんとお母さんは初めてキスしたんだよ

 って」

「そ、そんなこと拓真に言わなくていい！

 ・・・でも、教えてあげなくちゃね」

 二人にとって大切な場所なんだよって

二人は膝ひざの上で健やかに眠っている拓真を見て、微笑んだ。

これからも、ずっとずっと愛してる

窓の外では月明かりの元、静かに雪が舞っていた

これが私達の、恋愛のカタチ

08 恋愛のカタチ（後書き）

これでこの作品は完結です。

ここまでおつきあい有難う御座いました。
感想などがあれば是非お聞かせ下さい。

- 莉雨 -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9024c/>

恋愛のカタチ

2010年12月3日14時25分発行